

調査対象物質	分析法フローチャート	備考
<p>[25]2-(1-メチルプロピル)-4,6-ジニトロフェノール</p>	<p>【大気】</p> <pre> graph LR A[大気] --> B[捕集 Empore Disk C18 10L/分×24時間] B --> C[溶出^{注3} アセトン 10mL] C --> D[濃縮 窒素パージ 1mLまで^{注1 注3}] D --> E[メチル化^{注3} ジアゾメタン 3mL^{注1} 室温、1晩] E --> F[濃縮 窒素パージ] F --> G[転溶^{注3} アセトニトリル 1mL] G --> H[GC/MS又はGC/MS-SIM^{注3}] I[内標準添加 フェナントレン-d₁₀^{注3}] --> H </pre> <p><注>次に示す方法を採用した例もあった。</p> <p>1:アセトンによる溶出後の濃縮を0.1mLまで行い、メチル化をジアゾメタンでなく、ジアゾメタンエーテル溶液1mLで行った。また、測定機器としてCP-3800/1200Lを使用した。</p> <p>2:大気捕集後のEmpore Disk C18よりアセトン10mLで溶出させ、溶出液を高純度窒素により乾固させた。乾固試料に酢酸エチル0.2mL、メタノール50μLを加え溶解させた後、トリメチルシリルジアゾメタン0.6Mヘキサン溶液を10μL加え、室温で30分反応させた。再び高純度窒素により乾固させた後、ヘキサン1mLに乾固試料を溶解させ、フェナントレン-d₁₀を1μg添加した。また、測定機器としてGCMS-Agilent 5973を使用した。</p> <p>3:溶出を超音波洗浄機により行い(アセトン10mL、10分間)、2500rpmで10分間遠心分離を行い、2mLを分取した。その後の窒素パージによる濃縮を0.2mLまで行い、メチル化を行う時間を1時間とし、窒素パージによる濃縮を1mLまで行い、アセトニトリルによる転溶は行わなかった。内標準物質の添加量を50ngとした。また、測定機器としてGCMS-QP2010、カラムはDB-WAX、長さ30mを使用し、GC/MS-SIM-EIで測定した。</p> <p>「平成18年度化学物質分析法開発調査報告書」 準拠</p>	<p><分析原理> GC/MS又はGC/MS-SIM^{注3}</p> <p><検出下限値> 【大気】 (ng/m³) [25] 3.2</p> <p><分析条件> 機器^{注1} GCMS-QP5050A^{注2 注3} カラム Inert Cap WAX^{注3} 15m×0.25mm、0.25μm^{注3}</p>